

関連学会印象記

第14回日本救急医学会総会

須藤 政彦*

昭和48年秋の発足時には会員数1,000名弱、出題数100題弱であった日本救急医学会は、昭和54年には日本医学会の分科会となり、また看護部会、救急隊員部会も附設され、さらに各地に地方会が設立されるなど急成長し、昭和61年11月26, 27, 28日の3日間、横浜市の神奈川県立県民ホールを中心に15会場を使用して開催された第14回日本救急医学会総会時には正会員（医師）は4,000名を超え、学術総会の演題総数は712（うち医師部会540）、参会者総数は2,698名と、いずれも過去最高数を記録した。

この学会創立の昭和48年という時代的背景は、交通外傷が急増し、それに対応するため救急医療に力を注ぐ施設が徐々にふえはじめた頃である。これらの施設の医師が救急医学の情報交換の場を求めて学会が発足したもので、会員の所属科は外科、麻酔科、整形外科、脳外科など多岐にわたり、所属施設も大学病院、一般病院、その他の救急告示施設と多彩であった。その後多くの大学に救急部ができ、救命救急センター制度が発足すると共に日本救急医学会の会員数が急増しただけではなく、そのメンバー構成も少しずつ変わり、発足当時制定された会則が実情にそぐわないものとなったため、新会則が検討されたのち成立し、今回の第14回総会は新会則下の最初の総会となったのである。また総会運営が大学を離れて一般病院の主催で行われたのも今回ははじめてである。

その意義を強調するため、今次学術総会では特別演題の設定に際し、わが国の救急医学をここまで進歩発展させて来た因子をとりあげること、今日の外傷救急医療の水準を示すこと、そして現在

の救急医療のもつ問題点を検討することをその中心としたのである。

救急医療システムが適切であるか否かを検討する1つの方法としてDOA症例を分析することが考えられる。そこで第1日午前の全部を使って「DOA」のシンポジウムを行った。数年前までは各施設とも詳細に分析するほどのDOA症例をもたなかったため、蘇生率など搬入後の問題の検討に留まっていたが、最近症例がふえると共にDOA症例の搬入前の問題点にも眼が向けられるようになって来た。今回は多くの施設から、わが国では立ち遅れているボランティアや救急隊員に対する救急法教育の急務であることが強調され、特に重症心疾患患者の家族に対する心肺蘇生法教育の効果（足利日赤）など非常に興味深い発表がなされた。このような形でDOAを検討することは、その地域の救急搬送システム、医療施設やスタッフなどに何か改善すべき問題点があるか否かを教える効果が大きい。

今後の問題点という意味で最終日に「救急医育成の諸問題」についてシンポジウムが行われた。救急医学教室が次第に増加することが予想されるが、これらの教室員の進路の問題、救急診療にたずさわる医師のレベルアップ、指導医・認定医の問題など、わが国の救急医療の理想像を追求するために、今後も各施設の利害を超えて、この問題は熱心に討議されつづけねばならないであろう。

救急医学をレベルアップした因子は数多いが、特に呼吸循環管理と代謝栄養管理の進歩が重症救急患者の治療成績向上に果たした役割は大きい。第3日の「ARDSの病態と治療の進歩」のシンポジウムでは、この方面で活発な研究をしている救急施設からその病態や呼吸管理に関する研究成果

*済生会神奈川県病院

が発表されたが、今回の総会の特長の1つは、計画したシンポジウムに適した海外のトップクラスの研究者を招き、特別講演をしてもらうだけでなく、わが国のその分野におけるレベルを知ってもらうとしたことである。このシンポジウムに関連して招待された特別講演者は Harvard 大麻酔科の Zapol 教授である。Zapol 教授はこのシンポジウムを同時通訳によって熱心に聴講したのち、シンポジスト全員の発表内容に対し、大巾に時間を超過するほど丁寧なコメントを述べた。それにつづき教授は ARDS の病態と治療についての研究成果の特別講演を行った。同教授がこの方面の権威であることは ECMO その他多数の業績によってつとに有名である。

重症管理成績向上のもう1つの大きな理由は代謝栄養管理の進歩である。これに関して第2日に「stress situation における代謝異常とその管理」と題するシンポジウムが開かれた。中心静脈栄養法が確立されて以来、重症患者の栄養管理は以前に比し隔段の進歩をとげると共に各栄養素の代謝の研究を盛んにした。今回は敗血症、心筋梗塞、熱傷、MOF 等における代謝異常とその管理についてわが国の中心的な施設からの発表が行われたが、このシンポジウムでも前の Zapol 教授と同じく Harvard 大外科の Wilmore 教授にシンポジストの発表を聴いてもらったあと、同教授により重症患者の代謝管理についての研究をまとめた発表と、今後予想される代謝管理進歩の方向について特別講演が行われた。

前述のようにわが国の救急医療レベル急上昇のきっかけとなったのは外傷救急の需要である。今回はその進歩のあとを第2日の「胸部外傷」、第

1日の「脾損傷」の両シンポジウムで明らかにした。胸部外傷はかつて症例報告程度の研究発表に留まっていたが、各施設で症例を重ねるにつれ、病態や治療法のまとまった研究が行われるようになった。胸部外傷は直接、呼吸循環に関与するため、呼吸循環管理の進歩が治療成績向上に大きく貢献している。腹部外傷の分野は画像診断の進歩により、かつての「疑わしいものは開腹せよ」の時代から大きく変貌した。その進歩について診断面を中心に教育講演（沖縄県立中部、真栄城副院長）も行われたが、「脾損傷」のシンポジウムでは著しく進歩したその画像診断、保存的治療の可能性、臓器温存手術等についての発表がなされた。

救急胸部レントゲン（日医大益子先生）、direct mechanical ventricular assistance（Wright 州立大 McCabe 助教授）の教育講演も有意義であったが、特に宮崎医大生理、美原教授の「侵襲と線溶」の教育講演は臨床例を主にした明解な講義で会員を啓蒙する所が多かった。

本学会を構成するメンバーの多様性から一般演題のテーマは必然的に多種類となり、多数の会場に分散して同時進行で運営せざるをえないため、聴きたい演題が同時刻に数会場で発表される事態は避けられない。今回、これを少しでもおぎなう目的で、優れた演題で展示に適したもの12題を選定し、口演に加えてパネルも作成してもらい、会場ロビーに3日間展示して参会者にゆっくりみってもらうことにしたのも新しい試みである。

他の特別演題、一般演題、看護部会、救急隊員部会等に言及する余裕がなかったが、新会則により再スタートをきった日本救急医学会の発展を祈念するものである。